岡山大学農学部学術報告 Vol. 99, 7-12 (2010)

好熱好酸性アーキア Sulfolobus tokodaii 由来 シスタチオニン γ-シンターゼの精製及び性質検討

> 篠崎 舞・柳谷 昌彦・兼田 翔一郎・工藤 大蔵 遠藤 祐一・田村 隆・倉光 成紀^{a)}・稲垣 賢二 (農芸化学コース)

Purification and Characterization of Cystathionine γ-Synthase from Thermoacidophilic Archaea *Sulfolobus tokodaii*

Mai Shinozaki, Masahiko Yanagitani, Shouichirou Kaneda, Daizou Kudou, Yuuichi Endou, Takashi Tamura, Seiki Kuramitsu^{a)} and Kenji Inagaki

(Course of Agrochemical Bioscience)

The gene encoding a cystathionine γ -synthase from *Sulfolobus tokodaii* was cloned and expressed in *Escherihia coli* Rosetta-gami (DE3). Cystathionine γ -synthase [EC 2. 5. 1. 48] from *Sulfolobus tokodaii* (stCGS) was purified by heat treatment, DEAE- Toyopearl 650M and Sephacryl S-300 column chromatographies from *E. coli* transformants. stCGS shows optimum activity at pH 7.0, and is stable between pH5.0 and pH9.0. The optimum temperature of stCGS is above 100°C, and the enzyme showed the remaining activity of almost 100% up to 70°C. The K_m and V_{max} with O-phospho-L- homoserine as a substrate are 0.82 mM and 2.42 U/mg. To analyze the role of Phe 97 in the active site of stCGS, we constructed F97Y, R99C, and F97Y-R99C mutant enzymes. Although native stCGS has no activity toward L-methionine, F97Y mutant enzyme gained the elimination activity toward L-methionine.

Key words : cystathionine γ -synthase, pyridoxal 5'-phosphate, thermoacidophilic archaea, *Sulfolobus tokodaii*

緒言

Sulfolobus tokodaii strain7 は大分県別府温泉で採取 された超好熱好酸性のアーキア(古細菌)であり、単独 で硫化水素を分解する特徴を有している. Aeropyrum pernix や Pyrococcus horikoshii と比較すると生育限界 温度は87℃とやや低いが、硫化水素を分解する性質や酸 性を (pH2~3)を好む性質からすでに工場の排気ガス 対策で産業利用されていることで知られている. 生産さ れるタンパク質や酵素は非常に高い耐熱性を有してお り、化学、食品、医薬品など様々な産業分野への応用や 代謝経路の解明を行うことによる環境分野への盛んな利 用が期待されている.

本菌のゲノム DNA は1対の染色体からなっており, その長さは2,694,756 bp, GC 含量は32.8%で,2,826の ORF が確認された¹⁾. 今回その中からシスタチオニン γ -シンターゼ (CGS) [EC 2.5.1.48] 遺伝子と思われる ORF が同定された.

含硫アミノ酸代謝は多くの生物に普遍的に存在し,多 くの重要な生物反応に必須である.近年,含硫アミノ酸 代謝が動脈硬化,アルツハイマーの病理に関与し中間代 謝物質である硫化水素がガスメディエーターとして神経 や血管の機能制御に大きな役割を果たすことが明らかに されている.

硫黄代謝経路は細菌や植物では1-メチオニンを合成 する硫黄転移経路,哺乳類やカビ類では逆硫黄転移経路 が存在し,基質となる1-ホモセリン誘導体は細菌では O-アセチル-1-ホモセリン、もしくは O-サクシニル-1-ホモ セリン,植物では O-ホスホ-1-ホモセリンを生理的基質 とすることが知られている^{2,3)}.これらメチオニン代謝経 路に存在する酵素の多くは CGS と同じくピリドキサー ル5'-リン酸 (PLP)を補酵素とし、その構造や機能が 非常に類似していることがこれまでの研究で分かってい る.

CGS は1-ホモセリン誘導体と1-システインから1-シ スタチオニンの合成を触媒するビタミンB₆酵素であ る⁴⁾.1-システインの代わりに硫化水素やメタンチオー ルも基質としてそれぞれ1-ホモシステインや1-メチオ ニンを生成する.以上のようなγ-脱離反応の他にも1-ホモセリン誘導体のγ-脱離反応やγ-脱離反応も触媒す

Received October 1, 2009 a) 大阪大学大学院理学研究科 (Graduate School of Science, Osaka University) 7

る多機能性酵素である.近年結晶化によるタンパク質の 立体構造解析が盛んに行われているが, γ-ファミリー PLP 酵素群も例外ではなくその構造が次々に明らかに なってきており、シスタチオニン γ-リアーゼ (CGL)5) や1-メチオニン γ-リアーゼ (MGL)⁶⁾の構造解析が完 了したことによって、γ-ファミリー酵素群の構造が一通 りそろい、様々な知見が得られている.CGS では Nicotiana tabacum. Escherichia coli 由来 CGS がすでに 立体構造解析が完了している7.8).その構造はサブユニッ ト当たり約400~500アミノ酸からなるホモテトラマー構 造を有している.本研究は S. tokodaii 由来シスタチオ ニン γ-シンターゼ (stCGS) を大腸菌で大量発現させ, 精製及び機能解析を行うことにより、本酵素の基質認識 機構, 触媒機構及び耐熱機構の解明を行い, γ-ファミリ - PLP 酵素群に新たな知見を提供することを目的とし ている.

材料と方法

使用菌株、プラスミド

目的タンパク質発現における組換えプラスミドの宿主 には *Escherichia coli* Rosetta-gami (DE3) 株 [Δ araleu7697, Δ lacX74, Δ phoAPvuII, phoR, araD139, ahpC, galE, galK, rpsL, F' [lac⁺ (lacI^q) pro], gor522:: Tn10(TcR), trxB:: kan (DE3)pRARE(Cm^R)] を用い た. プラスミド DNA の精製は組換えプラスミド保有の 本菌から行った. プラスミドベクターには pET-11a (Novagen 社) を用いた.

シスタチオニンγ-シンターゼ発現プラスミドの構築

大腸菌組換えタンパク質発現用プラスミドベクター pET-11a に stCGS 遺伝子 (Fig. 1)を T7 プロモーター 下にあるマルチクローニングサイトに組み込んだ.目的 遺伝子断片には, BamH I 及び Nde I サイトを付加した. ベクターとインサートをこれらの制限酵素で処理し、ベ クター部分の T7-tag を取り除きライゲーションを行っ た.

形質転換体の培養

E. coli Rosetta-gami (DE3)/pET-stCGS を3.2Lの modified TB 培地に植菌し、37℃, 180 rpmで12時間培養 しこれを本培養とした. 培養開始より2時間後に IPTG を1 mMとなるよう添加し発現誘導を行った.

シスタチオニン γ-シンターゼの精製

集菌した菌体ペレットを菌体破砕用緩衝液(0.1 Mト リス塩酸(pH9.0), 1 mM EDTA, 0.05% 2-メルカプトエ タノール, 10 M PLP)を湿菌体重の2倍量で懸濁し, 150W, 10分間で超音波破砕を行った.この超音波破砕液 を無細胞抽出液とした.破砕液を14,000 rpm, 15分間で 遠心し菌体砕片を除去した後, 70℃, 30分間の熱処理を 行い, 14,000 rpm, 15分間で遠心分離を行った.沈殿を 除去し,得られた上清に対して硫酸アンモニウムを40% 飽和となるように加え,氷上で30分間穏やかに攪拌した. 14,000 rpm, 15分間で遠心し,上清と沈殿を分離した. 各沈殿を適当量の透析用緩衝液(20 mkトリス塩酸

(pH6.9), 1 m EDTA, 0.05% 2-メルカプトエタノー ル, 10 m PLP) に溶解した. その後, サンプルの100倍 量の透析用緩衝液で4℃, 2 時間透析を行い, さらに100 倍量の同緩衝液で一晩透析を行った.

タンパク質量 5 mg当たり 1 mLの DEAE-トヨパールイ オン交換樹脂(東ソー)を使用した.20 mMトリス塩酸 (pH7.0), 1 mM EDTA, 0.01% 2-メルカプトエタノー ル,10 M PLP で平衡化を行い溶出は20 mM, 100 mM, 200 mM, 500 mMの KClを用いステップワイズで行った.この DEAE 画分を200 mLのセファクリル S-300 樹脂を充填し たカラムを用いて20 mM トリス塩酸(pH7.0), 0.15 M NaCl の緩衝液を用い1 mL/1分間の流速でゲル濾過カラ ムクロマトグラフィーを行った.

酵素活性測定法(MBTH 法)

酵素活性測定には,置換反応によるシスタチオニンの 合成を見るのではなく, CGS の副反応であるβ脱離反応 で *O*-ホスホ-1-セリン (OPS) から生成するケト酸(ピ ルビン酸)を MBTH 法により定量した.その理由は, 基質や生成物となるシスタチオニンやホモセリン誘導体 は非常に高価であり,コストがかかる点と生成物の検出

- 1 GTGCATGGGTTGAGAGAAGGGACTAAAGTTACAACSGAAGGTATGATGAAGAGACTGGTGCTATAACTACTACCAATATATACAGACTACT 90 M H G L R E G T K V T T E G Y D E E T G A I T T P I Y 0 T T 91 - TCTTATATTTTATCCTATAGGTGAGAAATATCGGTATAGCCGAGAAGTTAACCCTACTGTACTTAAACTTGCCGAAAAGATATCGGAAATATCGGAATATCGGAATAGCGAGAAGTTAACCCTACTGTACTTAAACTTGCCGAAAAGATATCGGAACTGGACTTA - 180 S Y I Y P I G E K Y R Y S R E V N P T V L K L A E K I S E L
- 181 GAAGAGGCAGAGATGGGAGTAGCTITITCATCTGGAATGGGGGCATITCGTCACTTGGTTACATTAGCTAAGCCTGGGAGCAAAATA 270 E E A E M G V A F S S G M G A I S S T L L T L A K P G S K I
- 271 CTAATACATAGAGATATGTTTGGAAGGACTTACAGATTCTTACGGACTCATGCGTAATCTAGGAGTAGAAGTAGATGTTGCAAATCCA 360 L I H R D M F G R T Y R F F T D F M R N L G V E V D V A N P
- 361 GGAGAAATTTTAGAAATGGTAAAAGTCAAAAATACGATATTGTTATGTTGAAACTATATCAAATCCATATTCAAAGGTTATAGAATATT 450 G E I L E M V K V K K Y D I V Y V E T I S N P L L R V I D I
- 451 CCAGGTCTTTCAAAAATATGTAAAGAATGGAAGGATGGAAGCTTACTAATTACTGACGCTACTTTTTCAACACGAATCAACCAGAAACCGTTAGTT 540 P A L S K I C K E N G S L L I T D A T F S T P I N 0 K P L V
- 541 CAAGGTGCAGATATAGTTTTACATAGTGCTTCAAAATTTATAGCAGGACATAATGATGTTATTGCTGGTTTAGGTGCTGGGTCTAAAGAA 630 Q G A D I V L H S A S K F I A G H N D V I A G L G A G S K E
- 631 TTAATGACTAAAGTAGATTTAATGAGAAGAACTTTGGGCACATCTTTAGATCCTCATGCAGCATATCTTGTGATAAGAGGAATAAAAACT 720 L M T K V D L M R R T L G T S L D P H A A Y L V I R G I K T
- 721 CTTAAAATTAGAATGGATGTGATTAATTCAAATGCACGAAAATGCCGAATATTTACAAGAACATAATAAAATCAAATCAGTATATTAT 810 L K I R M D V I N S N A Q K I A E Y L Q E H N K I K S V Y Y
- 881 CCTGGACTAAAGTCACATCCAGATTACGAAACTGCTAGACGAATACTAAAAGGATACTGAGGTGGTGTGTAGTTACATTTGAAATTAAAGGTAGT 900 P G L K S H P D Y E T A R R I L K G Y G G V V T F E I K G S
- 991 GCAACAATGACTCATAGAACTTTAACTCCCGAAGAAAGGAAAATCATTGGTATTCGGATTCCATGTTAAGACTCTCTGTTGGAATAGAG A T M T H R T L T P E E R K I I G I S D S M L R L S V G I E

Fig. 1 DNA sequence and deduced amino acid sequence of cystathionine γ -synthase gene from *S*. tokodaii

及び定量が困難なためである。その点。O-ホスホ-1-セ リンは、安価であり、反応産物であるケト酸の定量も容 易なので、これを使用した.酵素希釈溶液(0.1M トリ ス塩酸 (pH9.0), 1 mM EDTA, 0.1g/L DTT, 10 M PLP)により適切に希釈させた酵素溶液をあらかじめ70 ℃.5分間でプレインキュベートしておいた1 mLの基質 溶液 (0.1M トリス塩酸 (pH9.0), 10mM OPS, 10 M PLP) に添加し70℃で反応を開始した. 10分間反応を行 い、100 µLの50% TCAを添加することにより反応を停 止した.上記の反応溶液0.8mLを1.6mLの1M 酢酸緩衝 液 (pH 5.0), 0.6 mLの0.1% MBTH を混合し, 50℃, 40 分間反応させた. MBTHとピルビン酸(酵素反応生成 物)のアミノカルボニル反応により生じたアジンの量を 320 nmの単色光の吸光度を測定することにより決定し た. あらかじめ作製した検量線から求めた分子吸光係数 の値を用いて酵素反応により生じたピルビン酸の量を測 定した. なお1Uは70℃で1 µmol/分間のピルビン酸を 生じる酵素量と定義した.

アポ酵素の調製

酵素中の補酵素 PLP を取り除くために PLP フリー緩 衝液(0.1M トリス塩酸(pH9.0),1 mM EDTA,0.1 g/L DTT)で一晩透析を行った.その後,酵素溶液に対して 終濃度10 mMとなるように PLP 酵素阻害剤であるヒドロ キシルアミン塩酸塩(石津製薬)を添加し37℃,2時間 インキュベートした.ヒドロキシルアミン処理後,ヒド ロキシルアミン及び PLP を取り除くため再度 PLP フ リー緩衝液で一晩透析を行ったものをアポ酵素とした.

脱離活性における基質特異性の検討

O-ホスホ-1-ホモセリンは、1-ホモセリンを基質とし て大腸菌ホモセリンキナーゼにより酵素的に合成した。 通常用いている10 mM *O*-ホスホ-1-セリンの代わりに各 種化合物を10 mMとなるように添加した基質溶液を作製 し、適当な濃度に希釈した酵素溶液を添加し、MBTH 法 により活性測定を行った.

変異酵素の作成

変異作成は部位特異的変異導入によって行った.反応 液50 μ lに対し PCR 緩衝液を25 μ l,dNTP 5 μ l,プライマ - S,AS を各約125 ng,鋳型 DNA と KOD FX DNA ポ リメラーゼ1 μ lを添加し PCR を行った.反応終了後に 鋳型 DNA 消化のために制限酵素 Dpn I を添加し37℃ で1時間インキュベートした.この反応液をE.coli JM109に形質転換したのち、プラスミド抽出を行った.

変異導入の確認は DNA シーケンスによって確認した.この変異導入プラスミドで *E. coli* Rosetta-gami (DE3)を形質転換し発現させ、検討に用いた.

結果と考察

酵素の精製

stCGS 発現用プラスミド pET-stCGS を有する大腸菌

形質転換体の可溶性画分に有効な CGS 活性が確認され た.この大腸菌を大量培養,破砕後,本酵素の精製を行 うことができた.好熱菌由来のタンパク質は高い熱安定 性を有しており,それを利用した70℃という高温での熱 処理によって簡便に不純タンパク質を大幅に除くことが できた.その後,DEAE-トヨパールイオン交換カラムと セファクリル S-300 ゲル濾過カラムクロマトのステッ プを踏むことにより精製酵素が得られた.精製酵素12µg を用いて,SDS-PAGE を行ったところ,ほぼ単一にまで 精製することができた (Fig. 2).



Fig. 2 SDS-PAGE of the cystathionine *γ*-synthase from *S*. *tokodaii*.

Lane M, molecular mass marker : phosphorylase b (97.0 kDa), albumin (66.0 kDa), ovalbumin (43.0 kDa), carbonic anhydrase (30 kDa), trypsin inhibitor (20.1 kDa), α -lactalbumin (14.4 KDa); Lane 1, cell free extract; Lane 2, heat treatment (70°C, 30 min); Lane 3, ammonium sulfate fractionation; Lane 4, DEAE-Toyopearl column chromatography; Lane 5, Sephacryl S-300 column chromatography.

stCGS 精製酵素の性質検討

stCGS の最適温度を明らかにするため30~100℃に設 定したヒートブロック中で酵素反応を行った.熱安定性 の検討は酵素溶液を30~100℃で60分間処理し,酵素活性 を測定した.熱安定性は70℃までほぼ100%の残存活性を 示した。一方,最適温度においては100℃で70℃の約4倍 の活性が検出された(Fig.3(A)(B)). Sulfolobus tokodaii strain7 は高度好熱菌であることから,その保有する 酵素も生育環境を反映した高い熱安定性を持つと考えら れる.

最適 pH についてはリン酸カリウム緩衝液やブリトン -ロビンソン広域緩衝液の場合は pH7.0の時が最も活性 が高く、トリス塩酸緩衝液では pH9.0が最適となり使用 する緩衝液によって最適pHが異なるという結果になっ た(Fig. 4 A).大腸菌由来、コリネ菌由来 CGS におい



Fig. 3 Effect of temperature on activity and stability of cystathionine γ -synthase from *S*. *tokodaii*

(A) Optimum temperature of cystathionine γ -synthase from *S. tokodaii*.

(B) Thermal stability of cystathionine γ -synthase from *S. tokodaii*.

- The enzyme activity was measured after incubation of the enzyme at various temperatures for 60 min.

ても使用する緩衝液の影響を大きく受けるという報告も ある⁹ことから *Sulfolobus tokodaii* 由来 CGS において も同じく影響を受けているものと思われる. pH 安定性 は, pH5.0~9.0において残存活性が80%以上と,比較的 安定であり,酸性領域で若干の失活が見られる程度であ った (Fig. 4 B).

アポ酵素の PLP 添加によるホロ化実験

ヒドロキシルアミンを用いて調製したアポ酵素にそれ ぞれ10⁻⁷, 10⁻⁶, 10⁻⁵ Mとなるよう PLP を添加し酵素活 性を測定した.アポ酵素は活性が完全に消失していた。 ホロ化実験では, 10⁻⁶ M PLP 添加時で10.2%,10⁻⁵ M PLP 添加時で36.2%の活性回復と PLP を加えていくに つれて活性が回復したことから本酵素が PLP 依存型酵 素であることが分かった.

脱離反応における本酵素の基質特異性

本酵素及びγ-ファミリー PLP 酵素のマルチプルア ライメントをとってみたところ,他種由来のCGSや MGLの活性中心において高度に保存されている Tyr 残 基が本酵素では存在せず,代わりに Phe 残基であること



Fig. 4 Effect of pH on activity and stability of cystathionine γ-synthase from S. tokodaii
(A) Optimum pH of cystathionine γ-synthase from S. tokodaii
Enzyme activity was measured in the following buffer.
, Britton-Robinson buffer; -, potassium

phospate buffer; ____, Tris-HCl buffer.

(B) pH stability of cystathionine γ -synthase from *S*. tokodaii

が分かった. この Tyr 残基は CGS や MGL の脱離反応 に重要な機能を持つとされている⁶⁾.そこで変異酵素 F97Y を作成し、基質特異性の比較検討を行った(Table 1). 野生型 CGS は、 O-サクシニル-l-ホモセリンより O-ホスホ-1-ホモセリンを基質とした時に高いγ脱離活 性が確認でき,細菌型でなく植物型の基質特異性を示し た. β-脱離基質は O-ホスホー1-セリン, 1-システイン, l-ホモシステイン、β-クロロ-l-アラニンなどが反応し た.1-システインの反応溶液からは硫化水素と思われる 腐卵臭が確認された.その他にもγ-脱離反応の反応中間 体と思われる1-ビニルグリシンも予想通り高い反応効 率を示した.変異酵素 F97Y では、基質に対する厳格性 が低下し,野生型 CGS では全く反応しない1-メチオニ ンなどに対して幅広いγ-脱離活性を示した.変異型に新 たに1-メチオニンのγ-脱離活性が見られたことは大変 興味深い. F97Y の基質特異性の厳格化が低下したこと から、本酵素の97番目のアミノ酸は基質の認識機構に関 わっていることが示唆された. また, CGS と MGL は構 造と触媒する反応が非常によく似ている.活性部位に関

	Wild Type Enzyme	F97Y mutant enzyme			
Substrate	Specific activity (mU/mg)	Relative activity (%)	Specific activity (mU/mg)	Relative activity (%)	
O-phospho-l -homoserine	2305	100	186	100)	
O-succinyl-l-homoserine	807	35	280	150.6	
l-homoserine	0	0	38	20.2	
l-methionine	0	0	68	36.4	
l-ethionine	0	0	12	6.2	γ –elimination
l-methionine sulfone	125	5.4	130	70.1	
l-methionine sulfoxide	4	0.2	11	5.7	
dl -homocysteine	12	0.5	368	198.1	
l-vinylglycine	15562	675	691	372.1	
O-phospho-l-serine	282	12.3	152	81.9	
O-acetyl-serine	0	0	0	0	
l-serine	0	0	12	6.2	
l-cysteine	208	9	133	71.8	β –elimination
S-methyl-l-cysteine	37	1.6	20	10.7	
S-ethyl-l-cysteine	66	2.9	30	16.4	
β -chloro-l -alanine	2009	87.1	1238	666.7	

Table 1 Substrate specificity of cystathionine γ -synthase and F97Y mutant enzyme from S. tokodaii

して、本酵素のF97Y の変異に加えて、99番目の Arg を Cys に、活性部位の構造を MGL 型に変換した変異酵素 を作成した。その結果 F97Y-R99C 変異酵素で1-メチ オニンに対して更なる活性上昇が見られた点が興味深 い.活性部位である97番目の Phe と99番目 Arg のアミ ノ酸を含む領域が本酵素で基質特異性に深く関わってい ると考えられる.

今後これらの変異酵素の機能解析,基質特異性の詳細 な比較,X線結晶構造解析による構造決定を行うことに より CGS だけではなくγ-ファミリー PLP 酵素の分子 進化の道筋や基質認識機構の解明に役立てたいと考えて いる.

要 約

好熱好酸性アーキア Sulfolobus tokodaii 由来シスタチ オニンγ-シンターゼ (stCGS) 遺伝子を pET-11a に組 み込み pET-stCGS を構築した.このベクターで *E. coli* Rosetta-gami (DE3) を形質転換し,本遺伝子 を発現させ,精製及び性質検討を行った.大腸菌で発現 したシスタチオニンγ-シンターゼの活性が無細胞抽出 液で確認できた.S. tokodaii シスタチオニンγ-シンタ ーゼを70℃熱処理 DEAE-トヨパールイオン交換カラム 等により単一精製した.精製酵素の最適温度は100℃以上 であり,熱安定性は60分間処理で70℃までほぼ100%の残 存活性を示した.また,最適pHについてはリン酸緩衝液 やブリトン-ロビンソン広域緩衝液の場合は pH7.0の時 が最も活性が高く,トリス塩酸緩衝液の場合は pH9.0が 最適であった.pH 安定性については pH5.0~9.0におい て安定であった.O-ホスホ-1-ホモセリンに対する Km, Vmax は、それぞれ0.82 nM, 2.42 U/mg であった.アポ 酵素のホロ化実験により、本酵素活性が PLP に依存して いることが明らかとなった.更に本酵素の脱離反応での 基質特異性の検討を行った.変異酵素を用いた実験によ り、stCGS の基質特異性には、活性中心に存在する Phe97 を含む領域が深く関わっていることが示唆された.

参考文献

- Kawarabayashi Y., Y. Hino, H. Horikawa, and H. Kikuchi Complete genome sequence of an aerobic thermoacidophilic crenarchaeon, *Sulfolobus tokodaii* strain7. *DNA Res.*, 8, 123-40 (2001)
- Holbrook E. L., R. C. Greene, and J. H. Krueger: Purification and properties of cystathionine γ-synthase from overproducing strains of *Escherichia coli*. *Biochemistry*, **29**, 435-442 (1990)
- 3) Ravanel S., B. Gakiere, D. Job, and R. Douce : Cystathionine γ-synthase from *Arabidopsis thaliana* : purification and biochemical characterization of the recombinant enzyme overexpressed in *Escherichia coli*. *Biochem*. J., **331**, 639–648 (1998)
- 4) Ravanel S., M. Droux, and R. Douce : Methionine biosynthesis in higher plants. Purification and characterization of cystathionine γ-synthase from spinach chloroplasts. *Arch. Biochem. Biophys.*, **316**, 572-84 (1995)
- 5) Messerschmidt A., M. Worbs, C. Steegborn, M. C. Wahl, R. Huber, B. Laber, and T. Clausen : Determinants of enzymatic specificity in the Cys-Met-metabolism PLP-dependent enzymes family : crystal structure of cystathionine γ-lyase from yeast and intrafamiliar structure comparison. *Biol. Chem.*, **384**, 373-386 (2003)
- 6) Kudou D., S. Misaki, M. Yamashita, T. Tamura, T. Takamura, T. Yoshioka, S. Yagi, M. R. Hoffman, A. Takimoto, and K. Inagaki Structure of the Antitumour

Enzyme l-Methionine γ -Lyase from *Pseudomonas putida* at 1.8 Å Resolution. *J. Biochem.*, **141**, 535-544 (2007)

- 7) Steegborn C., A. Messerschmidt, B. Laber, W. Streber, R. Huber, and T. Clausen : The crystal structure of cystathionine γ-synthase from *Nicotiana tabacum* reveals its substrate and reaction specificity. J. Mol. Biol., 290, 983-996 (1999)
- 8) Clausen T., R. Huber, L. Prade, M. C. Wahl, and A.

Messerschmidt : Crystal structure of *Escherichia coli* cystathionine γ -synthase at 1.5 Å resolution. *EMBO J.*, **17**, 6827 –6838 (1998)

9) Ryuichi M. and S. Isamu : Regulation of Aspartate Family Amino Acid Biosynthesis in *Brevibacterium flavum* V. Properties of Homoserine Kinase. J. Biochem., **71**, 219–226 (1972)